

## 34 発達障害者の「困ったとき、どうする集：感覚編」作成に向けた取り組み

研究所 脳機能系障害研究部 和田真

研究所 脳機能系障害研究部 清野絵

企画・情報部発達障害情報支援センター 林 克也，西山秀樹，西牧謙吾

【はじめに】発達障害における「生きにくさ」として、社会性・コミュニケーションの問題が広く知られているが、それだけでなく、感覚や運動の問題が存在することが注目されている。本研究では、発達障害を持つ人が直面している困難の中で、特に感覚の問題に焦点をあてて実情を把握し、対応方法の共有や支援機器の開発等へ活かすことを目的に、発達障害情報・支援センターのWEB上にあるアンケートサイトを用いた調査を行なった。

【方法】アンケートは、発達障害者の感覚の問題が、「どの感覚種別で」「どのような問題」が生じ「どのような対処」をして軽減させているのかについて、多肢選択と自由記述を組み合わせて聞き取った。質問項目は、発達障害に関する工学的支援の促進を検討する有志(OhToTメンバー)の協力を得て作成し、倫理審査委員会の承認の後、発達障害情報・支援センターのWEBサイトに掲載して、記入を募った。平成30年8月から平成31年1月までの調査期間で431件のデータが集まったため、感覚種別ごとの出現頻度を調べるとともに、自由記述欄から、問題ごとの具体的な内容と対処方法を調査した。

【結果】最もつらい問題が生じる感覚種別としては、聴覚が全体の約半数を占めることが明らかになった。このうち、自閉スペクトラム症の判定(または疑い)を受けた群(ASD群)では、聴覚につづいて、触覚の問題が目立つ一方で、ASD以外の発達障害の判定を受けた群(非ASD群)では、聴覚に続いて、視覚および嗅覚の問題が目立つ結果となった( $p < 0.01$ )。一方、自由記述から、聴覚の問題は、苦手な音や大きな音に対する苦痛(聴覚過敏)と、雑踏の中で人の話し声が聞き取りにくい(選択的聴取の困難)に大別できることがわかり、特に前者については、ノイズキャンセル付きのイヤホンで対処できている様子がわかった。しかし、同時に触覚の過敏が並存している方では、長時間イヤホン等を付けていられないという問題が浮かび上がった。同様に視覚の問題も、明るい光が苦手といった過敏と、多数の視覚情報があると混乱するといった問題に大別できた。前者については、サングラス等による遮断が有効である様子がわかった。一方、触覚の問題では、服の素材や形状に関する問題や、他人や苦手な対象との接触を忌避するといった過敏が目立った。好みの形状・素材の服を購入する、タグを外すなど予め苦手なものを避けるなどの対応がみられた。

【考察】今回の調査の結果、感覚系の問題として、本人や支援者が最も深刻に捉えているのは聴覚である一方、障害特性に応じて、多様性がみられることが示唆された。また、本人・支援者の試行錯誤の中で、現状においても、ある程度の対処ができている様子をうかがい知ることができたが、聴覚過敏と触覚過敏の並存により、イヤホンの長時間使用が困難になる、といった課題も明らかになった。今後、得られた知見を「困ったとき、どうする集：感覚編」として公開し、情報共有を計るとともに、ニーズを抽出し支援機器の開発へ活かす取り組みを続けていきたい。